カナダ・スキーの魅力

高野 富美夫

「森と湖の国」という形容がぴったりあてはまる楓のマークの国カナダ。ここ数年、夏冬を問わず、日本人のカナダへの旅行熱は、とどまるところを知らない。過去の旅行者数を見ると、一九七二年の五万二千四百三十八人から、一九七三年には七万千九十五人に伸び、一九七四年七万七千五百四十三人、一九七五年九万四百十一人、一九七六年十万六千七百八十三人と着実に伸びている。日本からカナダへのスキーヤーも、この増加率と比例して伸び、一九七六―七七のシーズンには三千人に達した。従来海外スキーと言えば、アルプスのあるスイス、フランス、オーストリアが中心になっていたが、スキーヤーの関心は除々にカナダへと移ってきている。

カナダでのスキーがこのようにクローズアップされてきたのはなぜだろうか。新聞、雑誌、テレビ等のマスコミ報道やカナダ政府観光局、カナダ太平洋航空などの広報活動、スキーヤーのための特別航空運賃が設定され、比較的安い料金で行けること、距離的にも、ヨーロッパと比べて非常に近いということ（ヨーロッパへは北回りで行っても十七時間かかるのに対し、カナダへは直行便で8時間、出発した当日にスキー場に立つことも可能だ）――もちろんこういうことが大きな要因であるが、やはりカナダ自体にスキーヤーの心を魅了する何かがあるために、それだけの人気を呼んでいるのであろう。

日本の二七倍の広さを持つカナダには、主なスキー場だけで七〇近くもある。まず思い浮かべるのがカナディアン・ロッキーにあるスキー場。バンフ・スプリングス・ホテルを中心とするバンフ近郊のサンシャイン・ビレッジ、レイク・ルイーズ、マウント・ノークウエイ、ジャスパーのマーモット、ベイスン、そしてバンクーバーから二時間のウイスラー・マウンテンらのスキー場は、ロッキー山中に位置しているという大きな利点をもっており、ひとつひとつが非常に個性的なスキー場だ。

サンシャイン・ビレッジは、名前のように、スキーをしなくとも楽しくなるような雰囲気を持っており、家族連れのスキーヤーにはもってこいのスキー場。レイク・ルイーズは三つの山（ホワイトホーン、テンプル、ターミガン）よりなる。コースはすべて林間コースで、それらがリフトで機能的に結ばれ、初心者から上級者まで飽くことのないスキーが楽しめる。マウント・ノークウエイの呼び物は何といっても完全上級者用の平均斜度四〇度、コブだらけの「ローン・パイン」という名の八百メートルの一枚バーン。一日に二七回このコースを滑ると、標高差で三万五千フィートかせいだことになり、「クラブ三万五千」というバッジが与えられる。ウイスラー・マウンテンはカナダ最大のスキー場で、標高差は北米のいかなるスキー場よりも長い。

このように、ひとつひとつが非常に個性的であるが、いずれのスキー場の頂上からも見渡されるカナディアン・ロッキーの雄姿はまさに圧巻。雪に抱かれたロッキーの岩峰群を見ながら滑る心地はまた格別で、これぞカナダ・スキーのだいご味と言えよう。

ここで忘れてならないのは、ロッキー山中でのヘリスキー。カナダのヘリスキーかヘリスキーのカナダかと言われるぐらいで、世界各地で行なわれているヘリスキーの中でも、その機動力、規模も最大。容易に入ることのできないロッキー山中で、腰まであるアスピリンスノーを蹴散らして滑る素晴らしさは、スキーヤーなら一度は叶えたい夢のひとつだ。

日本人にはまだまったくと言ってよいほど知られてないが、東部にも西のロッキーに負けないスキー場はある。ケベック州のモン・サンアンとモン・トレンブランがそれである。カナダの中のフランスと呼ばれ、英語よりもフランス語が重きをなしているケベック州では、何から何までフランス的。スキーヤーもフランス系が多く、フランスのスキー場に来ているのではと錯覚するぐらいだ。東部にはロッキー・マウンテンのような山脈はなく、西が男性的ならここは女性的な山並び。剛に対して柔という感じである。西にバンフ・スプリングス・ホテルがあれば、こちらにはシャンプラン城の面影を残したシャトー・フロンテナックがある、というように西と東が面白い対称をなしているのも特徴的。

コースが長く、すいていて、雪質が良く、景色が最高とくれば、スキーヤーにとってこれ以上のものはない。カナダのスキー場に幾度となく行って、その度に感じることは、老若男女を問わず、それぞれが実にうまいスキーの楽しみ方を知っているということである。それぞれが、余裕のあるスキーをしている。神風ばりにコブの上を飛んでいくスキーヤー、ホットドッグやフリースタイルを楽しむのも盛んで、ジーパンのすそをなびかせて滑る人も多い。スキー技術は二の次、格好は悪くとも強いスキー、これが若者に一般的に見られる傾向である。きわめて自由な感じだ。食事にたっぷり時間をかけ、日光浴をのんびり楽しみ、滑りたい時に滑る。それでも相当の距離が滑れる。それもそのはず、リフト待ち十分というのはめったにないのだから。またスキー場の施設の整っているのにも目を見張るものがある。ちょっとしたスキー場にはほとんどベビーシッターがいて、親がスキーをしている間子供の面倒を見てくれる。またチビッ子用のゲレンデも、安全な所に必ず設けられている。リフトはほとんどがダブルかトリプル・チェア。標識もわかりやすく設置されており、まさにスキーヤーズ天国。

カナダ。おもいっきりスキーを楽しませてくれる国だ。（スキージャーナル・エンタープライズ海外事業企画課）